ロシア史研究会 ISSN 0919-990X

ロシア史研ニューズレター

ОБЩЕСТВО ИССЛЕДОВАТЕЛЕЙ ИСТОРИИ РОССИИ

No. 80 *January 2011*

2010年度大会が閉幕

（写真は2010年度大会初日共通論題1の模様 / 梶 雅範 撮影）

2010 年度総会について

鈴木義一（事務局長）

総会は、成立要件を満たしていることを確認して開会しました。2009/10 年度中の新入会員は 7 名、退会者が 7 名で、2010 年 10 月 1 日現在の会員数は 260 名（うち休会者 4 名）です。規約第 4 条では、会員総数の 5 分の 1 の出席で総会が成立すると定めており、「休会制度内規」第 4 項に従って会員数から休会者数を除くと、定足数は 52 名となります。総会開会時の出席者は 58 名であったため、この時点で総会は成立していましたが、この他に 36 名の委任がありました。

冒頭で議長に中嶋毅氏（首都大学東京）を選出し、続いて鈴木義一事務局長が会務報告を行いました。事務局の業務の報告に加え、『ロシア史研究』は第 85 号（2009 年 11 月刊）・86 号（2010 年 5 月刊）が刊行されたこと、ニューズレターは第 76～79 号の合計 4 号が刊行されたこと、例会が 5 回開催されたこと（う

ち 3 回はソビエト史研究会と合同、1 回は共同利用・共同研究拠点イスラーム地域研究東京大学拠点との合同）を報告しました。次に、会計担当の伊賀上菜穂氏が会計報告を行い、さらに会計監事の塩川伸明・長縄光男の両氏による監査報告があり、いずれも承認を受けました。

続いて、内田健二委員長からロシア史研究会『50 周年記念資料集』刊行についての提案があり、5 名の会員から質問・意見が出されました。討論の結果、ニューズレターなどで委員会からさらに具体的な案を示しつつ企画を進めていくことが確認されました。次に内田委員長は、日本ロシア・東欧研究連絡協議会（JCREES）幹事会からの、加盟する 4(5)学会合同の大会を 2012 年に開催したいという提起を受け、ロシア史研究会もこれに加わることを提案して承認を受けました。さらに、2015 年に日本で開催する予定の ICCEES（International Council for Central and East European Studies）世界大会の見通しについて、JCREES 幹事会での議論をもとに説明しました。これを受けて、ロシア史研究会も「モラルサポート」を行うこととし、可能な範囲で協力することが確認されました。

最後に、富田武氏（成蹊大学）からシベリア「抑留」問題についての提起がありました。「抑留」の実態解明の現状についての説明があり、「日露双方の文書及びオーラル資料を用いて研究するプロジェクトを立ち上げたい」として参加の呼びかけを行いました。

2009/10 年度ロシア史研究会会計報告（2009. 9. 1～2010. 8. 31）［単位は円］

前年度繰越	ゆうちょ銀行定期貯金	1,354,000
	ゆうちょ銀行振替口座	6,275,465
	現金	223,014
	合計	7,993,554

2009/10 年度収支

収入	一般会員会費	1,429,000＊
	雑誌会員会費	109,500
	雑誌売上	92,100
	情報学研究所	151,498
	広告収入	105,000
	みずほ銀行利子	57
	合計	1,887,155

支出

ＮＬ関連	357,827
雑誌印刷・発送	326,787
名簿関連	52,905

例会関連	9,300
会計関連	66,133
事務局関連	6,889
各種会費	45,080
大会関連費	38,593
合計	903,514

大会関連費（09/10 年度）　-38,593

収入		支出	
非会員参加費	0	バイト代	66,120
懇親会費	286,000	懇親会費	286,000
祝金（日ソ）	10,000	食事代	8,260
祝金（ナウカ・ジャパン）	20,000	事務	9,248
雑誌売上	0	会場代	57,600
大学補助金（法政大学）	100,000	看板作製・設置	26,000
		銀行振込手数料	1,365
計	416,000	計	454,593

次年度繰越

ゆうちょ銀行定期貯金	2,354,000
ゆうちょ銀行口座	3,791,580
ゆうちょ銀行振替口座	2,406,980
みずほ銀行普通預金	385,264
現金	39,371
合計	8,977,195

前年度繰越＋収入＝支出＋次年度繰越＝　9,880,709

2009/2010 年度の収支（次年度繰越-前年度繰越）983,641 の黒字

＊2009/2010 年度一般会員請求額 1,480,000、納入額 1,282,000

A 会員 133 名（8000）、うち家族割引 1 名（4000）、委員割引 12 名（3000）、休会 1 名

B 会員 132 名（4000）、うち家族割引 4 名（2000）、委員割引 3 名（0）、休会 5 名

本頁は、一般公開のために編集されました（2018年10月13日）。
会計監査委員による監査の結果、問題ないことが承認されたことが掲載されています。また、会計監査報告原本は、事務局に保管されています。

＜2010年度大会印象記＞

２０１０年度ロシア史研究会大会印象記

小澤治子（新潟国際情報大学）

２０１０年度のロシア史研究会大会は立教大学の池袋キャンパスで１０月１６日，１０月１７日の両日開催され，自由論題で６本，共通論題１「ロシアと東アジア世界――１９世紀半ばから２０世紀初頭の展開」で３本，共通論題２「啓蒙と専制」で３本、さらにパネル「『共産主義建設期』のソ連における国家と社会」で３本，合計１５本の報告が行われた。当然ながらすべてのセッションに参加したわけではなく、また感想を述べることのできる論題は能力的にも限られている。そこでここでは共通論題１を中心に私なりに論点を整理し，感想を述べたいと思う。

ここ数年，ロシア史研究会大会においては毎年のように１９世紀から２０世紀にかけての日露関係，また日ソ関係をテーマとした共通論題あるいはパネルが組まれ，一次史料に依拠した精緻な研究報告が行われている。昨年度も「対日友好期のロシア・ソ連の日本観」というパネルで貴重な勉強をさせていただいたことは、記憶に新しい。しかし、日露関係あるいは日ソ関係などの２国間関係に限定せずに、ロシアが東アジアをどう認識し，この地域にどう関与したかを大会のテーマの一つに取り上げたことは従来なかったように思われる。その意味で今回のこの企画は意欲的な試みであったと言えよう。和田春樹会員は１９世紀半ばから２０世紀初頭におけるロシアの対日政策の特色について、デイヴッド・ウルフ会員はこの時期の日露関係全体の評価について、また中見立夫会員は東アジアの地域概念と国際関係に言及しながら、それぞれ興味深い報告が行われた。個々の報告の細かい内容には立ち入らないが，大きく分けて３つの論点に整理することができると思われる。

第１は，１９世紀半ばから２０世紀初頭のロシアの対日政策をどう評価するかという点である。和田会員は報告の中で，ロシアと中国との関係とは異なり，ロシアの対日アプローチ，また朝鮮半島へのアプローチは１９世紀末まで友好的であったが、日清戦争以後，日本の「満州」への野心が明確になってから対日アプローチが強硬なものに変化したと指摘する。これに対してコメンテーターのヤロスラフ・シュラトフ会員はロシアの朝鮮半島に対するアプローチと日本に対するアプローチは性格が異なり，１９世紀においてもロシアは日本を脅威と認識していたと述べる。また同じくコメンテーターの岡本隆司氏からはロシアの満州進出が朝鮮半島政策とどうかかわっているかが重要だとの発言があった。

論点の第２は，中見氏の報告にあったように、ロシアは東アジアをひとつの地域社会として認識していたかどうか、また認識していたとすればそれはいつごろからのことか、という点である。この点についてはコメンテーターからもまたフロアからも様々な興味深い発言が行われた。今後さらに議論を深める必要があろう。

論点の第３として，１９世紀以降の東アジアの地域概念を考えるにあたってロシア，中国，韓国だけではなく、アメリカについても考慮に入れる必要があるというフロアからの指摘に言及しておきたい。この点についても様々な意見が示されたが、ウルフ氏が「アムール川をシベリアのミシシッピー」と述べていたことは興味深い。アメリカ・ファクターと東アジア，これは東アジアの地域概念をどう定義するか、またロシアの東アジアへの関与をどうみるかと合わせて，今後考察していく必要があろう。

共通論題１と関連の大きいテーマに，自由論題の一つ「コンブの道――サハリン島と中華世界」（神長英輔会員）の報告があった。１９世紀から２０世紀初頭の北東アジアの交易とからめてロシアと東アジア世界を考える時，また新たな視角が必要になろう。この時期のロシアと東アジアについて歴史的観点から研究を深め議論を重ねていくことは、本研究会が今後果たすべき役割の一つであると考える。そのような研究の積み重ねの上に，今日の日ロ関係を考える手がかりがあるのではなかろうか。

2009年度ロシア史研究会大会印象記

瀧口　順也（北海道大学スラブ研究センター非常勤研究員）

昨年の大会にも顔を出してはいたが、入会してからは今大会が初めてであり、総会にも初参加した。すべてのセッションに参加する事はできなかったが、私なりに経験した 2010 年大会を振り返ってみたい。まず、全体を通しての感想を述べるならば、緊張感のあるセッションの中にも友好さや和やかさを感じる事ができ、同時に建設的な議論も数多く展開された充実した大会であったと感じた。

それぞれが質の高い報告だった自由論題も総じて興味深いものであったが、特に印象に残ったのは、私の関心とも重なる共通論題Ⅱ「『共産主義建設期』のソ連における国家と社会」であった。共通論題Ⅱでは、松戸清裕氏、河本和子氏、松井康浩氏がポスト・スターリン期を扱う報告を行った。松戸報告は犯罪とその対応に、河本報告は同志裁判所に焦点を当て、1960 年前後の「ソヴィエト国家」と「社会（集団）」の関係性に重要な考察を与えた。他方、松井報告は女子学生の日記や自叙伝を扱い、ソ連時代を生きた個人の「主体性」に迫ろうとするものであった。報告に続く中地美枝氏のコメントは各報告を補完しつつ、疑問点を整理し補足説明を

促す極めて有益なものであった。多くの参加者からの質問・コメントも相次ぎ、予定時間を大幅に延長する結果となったが、司会の宇山智彦氏の「このような面白いパネルを、2 時間でまとめる方が無理」という言葉に首肯するのみであった。

全体として、（私自身も含めてではあるが）院生や若手研究者の報告が少なかったのは残念な気がする。このような機会は、待っていても訪れるものではない。自戒を込めて述べれば、自由論題のみならず、パネルを組織する側としても若い研究者が積極的に行うべきであろう。

また、異なる文脈ではあるが、総会の中の発言にもあったように知己の研究者同士が触れ合うためだけの「内向き」な研究会にしてはならないとも感じさせられた。共通論題 I のような中国史専門家（岡本隆司氏）をコメンテーターに迎えたセッションなどは、今後も継続される事を期待する。更には、諸外国のロシア史関連の学会・研究会（ASEEES［前 AAASS］や BASSEES など）と協力し、海外からの参加者を招いたパネルを組むのも一案ではないだろうか。勿論、単純な会の「国際化」という意図ではなく、より外に向けた発信を行う為にも必要な事だと思われる。そのような場合、報告は英語もしくはロシア語に限定されるかも知れないが、今大会でも共通論題 I のデイヴィッド・ウルフ報告は英語で行われたし、その後の討論が日本語の報告ではないという理由で減退したという印象はない。このような経験は、総会でも話題に上った 2015 年の ICCEES へのロシア史研からのパネル面でのサポートに直結する貢献になるであろう。

最後に、大会運営に携わった委員の方々、髙尾千津子氏をはじめとする会場担当の方々の尽力なしに大会の成功は成し得なかったであろう。末筆ながら、心より感謝と御礼を申し上げたい。

（写真は2010年度大会初日立教大学第１食堂での懇親会集合写真/ 梶 雅範 撮影）

『ロシア史研究』87 号の訂正とお詫び

『ロシア史研究』87号において以下の過ちがありましたので訂正してお詫びいたします。橋本伸也氏の著作『帝国・身分・学校　帝制期ロシアにおける教

育の社会文化史』の書評に際して、副題部分が目次欄では「帝政期ロシアにおける教育の社会文化史」となり、また本文55頁の題名欄では「帝政期における教育の社会文化史」となっておりました。どちらも編集部根村亮のミスであり、著者の橋本伸也氏、書評執筆者の竹中浩氏、および関係者の方々にご迷惑をおかけしたことをお詫びして訂正いたします。

１月のロシア史研例会の案内（ソビエト史研究会との共催）
日時:　１月２２日（土）午後３時
合評会　塩川伸明『冷戦終焉２０年一何が、どのようにして終わったのか』
評者:　鈴木義一氏（東京外国語大学）、大串敦氏（早稲田大学）
会場：東京大学弥生総合研究棟研究会室Y505号室（東京都文京区本郷7-3-1）
http://www.j.u-tokyo.ac.jp/about/access.html
＊土曜日は建物が施錠されるため、東京大学弥生総合研究棟の入口付近に定刻の少し前に集合してください。

事務局からのお知らせ

2011 年の大会の準備を開始しました。まず、大会の共通論題についての提案を募集します。書式はとくに定めませんので、2 月末日までに事務局宛にお送りください。それから、自由論題とパネルの募集も開始します。ロシア史研究会のホームページ (http://wwwsoc.nii.ac.jp/jssrh/taikai/index.html) に応募フォームを掲載してあるので、必要事項を記入して 4 月末日までに応募して下さい。なお、大会の日程と開催校については現在委員会で検討中ですので、決まり次第研究会のホームページでお知らせします。

いずれも、下記のいずれかの方法でお送りください。

E-mail: jssrh-office(at)tufs.ac.jp
Fax: 042-330-5429（「ロシア史研究会事務局宛」と明記して下さい）
郵便:　〒183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1
東京外国語大学外国語学部鈴木義一研究室気付
ロシア史研究会事務局宛

ロシア史研ニューズレター
第80号　2011年1月17日発行
編集・発行　ロシア史研究会委員会
〒183-8534
東京都府中市朝日町3-11-1
東京外国語大学外国語学部
鈴木義一研究室気付